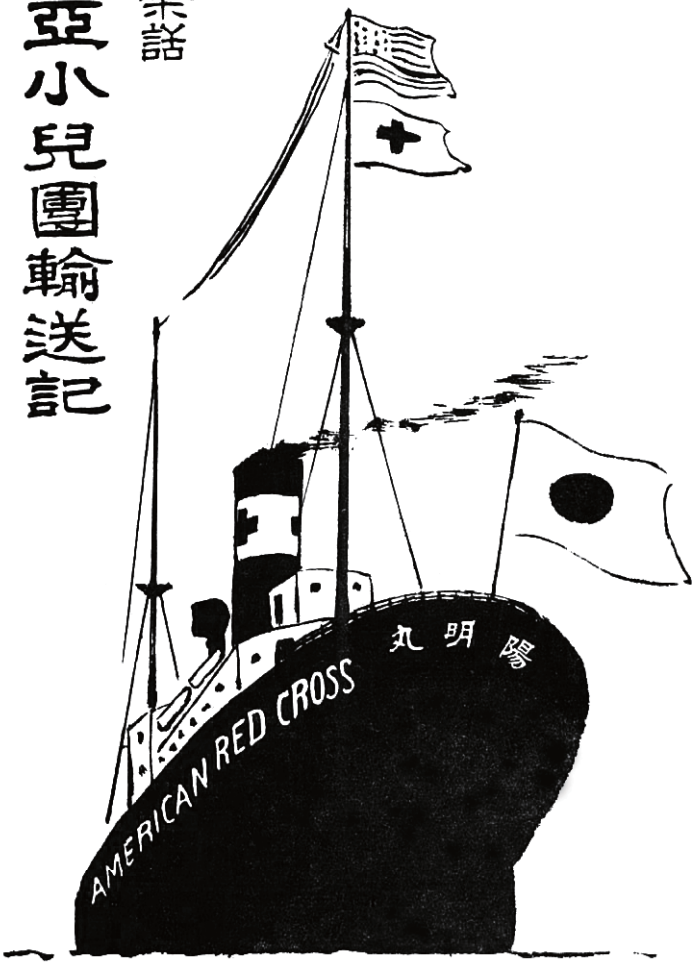
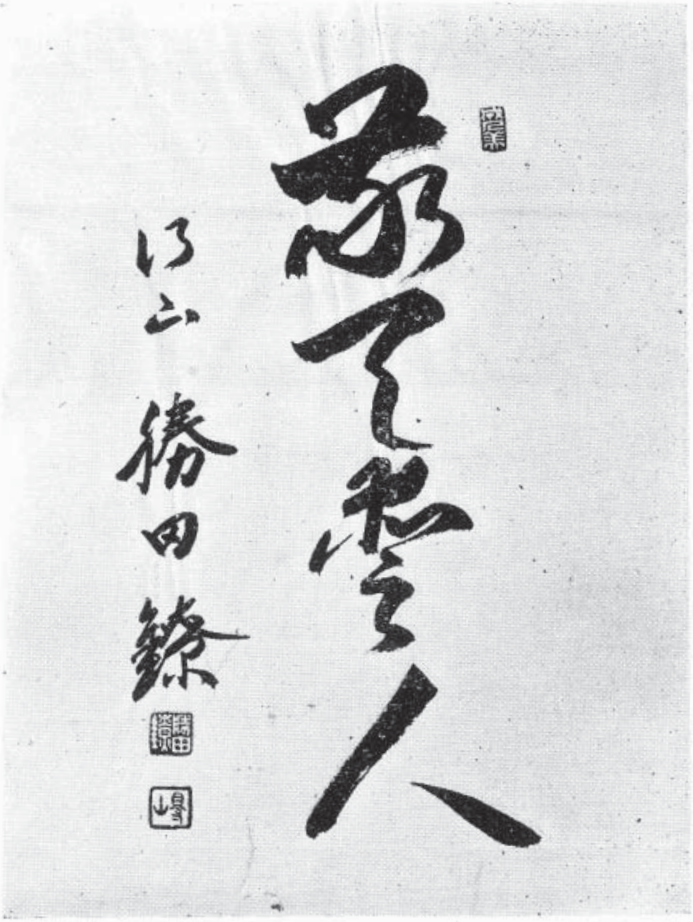
赤色革命余話

露西亞小兒團輸送記





題字　神戸市會議長　勝田汽船會社社長　勝田銀次郎氏

THE AMERICAN RED CROSS

Koivisto, Finland, October 13,1920

Captain M. Kayahara,

S.S. Yomei Maru, Koivisto, Finland.

Dear Captain Kayahara:--

Our long and unique voyage together in the good ship Yomei Maru will be ended tomorrow or next day. Half of the Petrograd Children's Colony has already been debarked from the Yomei Maru, after 14,800 miles of travel from Vladivostok, which we left three months ago today. The other half will go ashore tomorrow, thus completing their sea-trip in the effort to return them to their parents. They are now separated by but a few miles from Petrograd, their home before they came into Red Cross care in Siberia-two and a half years ago, it will be in a short time.

I know that in spite of their eagerness to get home, the Children are saying goodby to the Yomei Maru with reluctance and with much sadness. They have come to look upon it as a safe home on the many seas we have traversed. In spite of our shipboard troubles, which have been many, and our daily mishaps inseparable from transporting such a large number of children in close quarters, the children will always remember the Yomei Maru as the ship which brought them safely three-quarters of the way around the world. And they will always remember your many kind acts to them.

During these last few days we have all been too busy getting the Children's Colony ashore to have time for much ceremony in the way of farewell. We must all say goodby to you and hurry ashore. I know that I can speak for the entire colony and for the American personnel in expressing our appreciation for your many courtesies and in wishing you good luck in the future. And may you always have as fair weather and as smooth seas as have favored the Yomei Maru and her children-passengers for three months.

It will be a great pleasure for me to send to Col. Teusler at Tokyo and to your owners copies of this letter, and they in turn will be glad to know that the Yomei Maru carried 780 children and 180 other people from Vladivostok to Finland without a single serious accident at sea and with comfort and much enjoyment to all.

This expression of thanks is meant also for those of your officers and crew who also extended many courtesies and were kind to and thoughtful of our Children's Colony.

Yours truly,

R.H. Allen

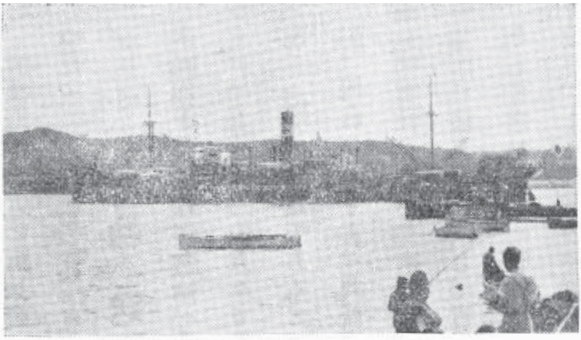
R.H. ALLEN
Chief Executive, Petrograd
Children's Colony Expedition

アレン大佐より船長への書簡

人生五十と云ふ峠に達し、過ぎて來た
阪道の中で、最も深く印象に殘つて居
るものを綴り、年賀狀に代えました

昭和九年元旦

茅原基治



浦潮斯德に於ける陽明丸

赤色革命餘話

露西亞小兒團輸送記

茅原基治

小兒團の由來

一九一七年三月の、露國大革命に續いて、帝政當時の權門富豪及び知識階級を目標とした、戰慄的大暴動が勃發し、瞬時にして、露都ペトログラードを席捲した。

その、放火、掠奪、暴行、殺人等の大慘禍の中から、親を顧み弟妹を庇ふ遑なく、總に身を以て脱出し、慘火の東漸と共に、當もなくシベリヤの荒野に彷徨ひ出、シベリヤ遠征中の聯合國軍に救はれ、續いて米國赤十字社派遣部隊に收容さ

れ、浦塩斯德附近の舊兵舍に、味氣ない日を送つて居る、九百人に近い婦人小兒の一團があつた。

輸送準備

米國赤十字社は、勿論、人道的立場から彼等を救護して居たのであるが、一團の子弟の多くが、上流權門の人々であつた爲、帝政復活後、外交上優越の地歩を占めんとする、ヤンキー一流の政策であるとも噂されて居た。

が、何れにもせよ、共産黨驅逐の聯合軍も、復辟派も一向に振はず、ソビエート政權は益々堅實性を帶びて來、荏苒浦塩斯德に淹留し難い狀勢となつたので、米國は此の一團を佛蘭西に移す事に決し、貨物船陽明丸を傭船した。

そして之れに、一時的ではあるが、中甲板全部を客室にし、上層甲板下に病室、浴場等を設け、また客室の換氣を行ふ爲、要所々々に八箇の電氣通風機を据付けるなど、一寸した汽船には見られない程の、立派な設備を施した。

仁俠に富める船主勝田汽船株式會社社長勝田銀次郎氏から、數萬圓の材料の寄附があり

大阪鐵工所因島工場の、犧牲的奉仕があつたにも拘らず、工事費拾數萬圓を要したのを見ても、其の設備の完璧さが窺知されよう。

航路の選擇

浦塩斯德から佛蘭西への航海は、通常なら、支那海、印度洋から、スエズ運河を經由すべきであるが、時恰も夏の眞盛りで、小兒達の保健上、印度洋の航海を避けたいといふ醫官の注意と、米本國赤十字社員の要望から、東廻り、即ち太平洋を横斷し、桑港に寄り、南航してパナマ運河を通過し、再び北上して紐育に寄港し、それから一路大西洋を東航するに決定した。

そして陽明丸は、航海上最も適當の吃水を整える爲、紐育行の砂糖四千噸を積んで神戸を出帆し、途中門司で、焚料炭と淡水を積み込み、愈々浦塩斯德へ向つた。

神戸から浦鹽斯德まで、航程八百五十浬。

浦塩斯德の港口、ルシアル島の海岸一帶で、待ち設けて居た一團の子女達は、陽明丸の姿を見ると、一齊に歡呼の聲を上げて迎へた、時に一九二〇年七月九日。

浦塩斯德

陽明丸が、煙突に赤十字、舷側にアメリカン・レッドクロスと大書し、メイン・マストに、米國々旗と赤十字旗を連掲し、船尾に大日章旗を飜へして入港すると、我警備艦肥前から、何か頻りに手旗で信號して居たが、投錨するや否や、一團の水兵がボートで漕ぎ着けた。

任務こそ違へ、等しく海の子である乘組船員と水兵の間には、初對面の挨拶など面倒なものは全然不用で、忽ち肩を組んで一團となり、互にニュースの交換を始める。其の情景は極めて親密で、實に美しいものであつた。

所が、陸軍の方は、さうでない。

其の當時は未だ、相當の部隊が市中に駐屯して居たが、上陸場や市中で出會つても、多數のカーキー服は、會釋一つ交さぬ全然路傍の人に過ぎなかつた。

一日、訪問を受けた某參謀大尉に、こちらで遠征の勞を犒ふ積りでも、

「はい。さうであります。」

と、答へられると、次の句が出ないと話したところが、これは痛み入つたと笑つて居た。

ソビエート政廳及び諸官衙は勿論、大建築物には悉く赤旗を掲げて居るが、港口の大要塞や、附近の高地には日章旗が飜り、港内には少將旗を檣頭高く掲げた我軍艦肥前が、武裝を解除した露國の小艦艇や、壞敗した假裝巡洋艦（これは我國から返還した姉川艦であつた）を監視して居る。

外國の港で、旭光燦然たる軍艦旗を拜する時、吾等海の子は言ひ知れぬ心強さと、親しみを感じ、しかも嚴肅な氣持に打たれる。

嘗て米國西岸、殊に加州方面に排日氣運が濃厚となり、在留邦人が心痛して居つた時、我練習艦隊の出雲、八雲、磐手の三艦が、舳艫相銜み、桑港々頭に其の雄姿を現はした。桑港在留者は勿論、百里の道を遠しとせず、馳せ付けた多數の邦人は、聲を擧げて泣いて喜んだと云ふ。

如何に頑冥な軍縮論者と雖も、海外で旭光輝く軍艦旗を拜したなら、忽ち心境に一大變化を來すであらう。そして、彼等は云ふであらう。

「軍艦は侵略的武器でない。」と。

港の正面、高臺の一角に聳えて居た、浦塩斯德最大の百貨店、クンストアルバースは、革命直後暴徒の襲撃を受け、しかも其の經營者が獨逸人であつた爲、掠奪は徹底的に行はれ、室内の裝飾は何一つ殘らず、壁まで所々剝げ落ちて、まるで廢墟になつて居り、其の他の大商店も往日の面影を止めず、加ふるに新ルーブル紙幣に對する不賣斷行で、陰慘な空氣は全市に沈滯して居た。

そして街路では、よれよれの服を纏ふた警吏や、疲勝困憊、喪家の犬のやうにオドオドした市民等が、隊伍整然と、市中を巡察する各國聯合軍や、我巡察隊を羨しさうに見送づて居たりした。

專制抑壓に憤起したスラブ民族は、革命によつて何を獲たか？　共産政治を說く者は、先づ此の現實を凝視する必要があらう。

着港後晝夜兼行で、給養品、食料品等を積み込み、十三日の午後、一行九百六十名を乘船させた。即ち

露國男兒　四百二十八名
露國女兒　三百五十一名
露國婦人　八十七名
獨墺匈兵士　七十七名
米國赤十字社幹部　十六名
米國Y・M・C・A派遣員　一名

之を十數班に分ち、別に少年團及び少女團を設けて、監督指導に當らして居る。

小兒は十歳前後が最も多く、中には四歳、或は二十歳位な者も居たが、その年齢の平均は十二三歳であつた。

婦人は二十二三歳から三十歳位迄で、中には立派な畫家もあり、何れも相當教養のあるところから、小兒達の教師や、病室勤務に當つて居た。

小兒團幹部

此の婦人連の中には、英語を解する者もあつたが、惡戯盛りの小兒達とは、言語が通じないので、全航程を通じて閉口した。

八百に近い小兒の一行中、親又は兄弟姉妹と共に在る者は指を屈する程で、殆ど總ては慘火の中で親、兄弟姉妹と生別し、今は生死も不明ながら、父戀し母戀し、兄は――、妹は――と、思ひを遠く西露の空に馳せて居る、可憐な薄倖兒ばかりであつた。

米國赤十字社の構成は、我國のそれと餘程相違するところがあり、幹部は悉く軍職にある人で、

隊長　アレン中佐
副長　ブラムホール少佐
醫務長　エバソール軍醫少佐
衛生係長　デビソン軍醫少佐
主計長　ローラン大尉
警務係長　ウォーカー大尉

給養係長　　アンブロース中尉

外に軍醫　　三名

以上の外、小兒達から、マザー、マザーと、慕はれて居る米國赤十字社婦人部派遣の、キャンプベル夫人と、Y.M.C.A派遣のウード氏の二人は、專ら小兒團の娯樂と體操に當つて居た。

獨墺匈兵士は、東部戰線で露軍に捕へられて居たもので、革命騷ぎに其の收容所を脫出し、シベリヤ派遣の聯合國軍の手を經て、米國赤十字社派遣部隊に收容され、此の一團の炊事、雜務を担當して居た。

一時に九百六十名の珍客を迎へた陽明丸は、六十餘名の乘組員を合せて、一千數十名の大きな俄世帶となり、上を下への大混雜裡に、七月十三日の夕刻、室蘭に向げて浦塩斯德を出帆した。

浦塩斯德——室蘭

出帆當夜は、放たれた小鳥のやうに、上甲板を馳け廻る小兒もあれば、遠く水平線に明

滅する港口の、アスコルド島燈臺を物思はしげに見送る婦人達もあつた。

翌朝は、もう一物も眼を遮るものもない日本海の海原だ。

大陸露西亞に生れて露西亞に育つた小兒達だ。始めて海に出た嬉しさと珍らしさに、歡聲を上げて騒ぎ廻つて喜んで居た。

嬉しいか、騒げ、薄倖の小兒達！　せめてこれが、幸福への、船路の旅であることを祈り度いぞ！

午後になつて、行手の水平線に、ポツリと浮んだは、海抜七百四米（二千三百余尺）の大島。續いて三百九米（壹千余尺）の小島。それから、奥羽、北海道の、山々の姿が見え出した。

日没後間もなく、白神崎燈臺の燈光が見え出すと、小兒達は船首樓上に、黒山の如く盛り上つて騒ぎ立てた。

十五日は又早朝から、漁船を指し海岸を眺め、津輕海峽東北端の、恵山燈臺に興がり、峻峰駒形の火山を仰ぎつつ、正午頃、室蘭の港に入港した。

この航程、四百七十二浬

室蘭港

室蘭埠頭の一行（右端はアレン隊長）

浦塩斯德で積込んだ牛肉に、不良のものがあつたので、室蘭で百ハインド・クオーター（二十五頭分）買入れの必要を生じ、それと、野菜類約五千斤とを、航海中無線電信で註文して置いたのだが、陽明丸の使命を知らなかつた船主代理店では、飛んでもない誤電と笑殺して居た。で、入港後、陽明丸が千餘名の大世帯と知つて、俄かに狂奔し、最大の努力によつて、やつと掻き集めたのが十二頭分。しかも牛肉代用の肉類がないので、何事も大架裟な米人をして、プーア・ボート（貧弱な港）と冷評せしめたのは、洵に遺憾であつた。

日本といふ國へ一歩でもと、上陸を熟望する一行の爲、當局へ夫々手續したところ、室蘭水上△△は、思想問題、媾和條約批准未了の理由で、米人以外は罷りならぬと拒否された。

そこで、ソビエート政權に追はれた、しかも頑是ない小兒達に、赤い思想のある筈のない事、一路歸國を急きつつある獨墺匈兵士が、言語不通の上、土地不案内の室蘭に留まる筈のない事、尙又米國赤十字社が、保護監督して居る一行であるから、上陸拒否は當を得たものでない事等を力說し、やつと船長がその責任を持つ事で諒解を得た。

これで、我國の△△の頭が、如何に不敏で融通が利かぬかに、呆れて居るところへ今度は、一應臨檢すると云つて來船した△員數名が、船内を一巡して後、

「何が御馳走を、成る可く洋食が欲しい。」

との御託宣だ。

時正に午前十一時十分、食料淡水の補給を終り次第、出帆するので繁忙を極めて居る際殊に外人環視の眞只中へ、花見氣分で御輿を据える△△根性の陋劣さと、非常識さとには

舌を捲かざるを得なかつた。

相手はイン・ザ・ネーム・オブ・ピープルス（人民の名に於て）の米人だ。此の醜態を、——筆者は敢て醜態といふ。——何んと見たであらうか。

此の間に在つて、代理店栗林商店の親切機敏なる擧措と、室蘭中學校の好意、及び室蘭區役所の歡迎があつて、△△の爲傷けられた面目を和げ得たのは、室蘭區民の爲、又日本の爲に善ばしい事であつた。

栗林商店は前記大量の食料品を、短時間内に調達する爲に、社員を各所に派遣し、一方、一行の上陸の爲に艀船や小蒸汽船を用意し、更に又キャンプベル夫人の買物の爲に社員瓜生氏を、官衙訪問のアレン隊長の爲には、室蘭中學校に乞ふて日沼教諭を、夫々通譯に當らしめられた。

室蘭區役所は吏員數名を上陸場に派して一行を迎へ、直に之を小學校に案内し、茶菓を供し繪葉書を贈り、學童の柔劍道試合を見せ、校庭では言葉は通せぬながら、僞らぬ純眞な日露兒童が、互に手を握り肩を打つて戯れ、交歡少時の後、一行は市中を一巡して夕刻

歸船した。

學校で、氣の毒な一行の話を敎へられた兒童十數名は、各々菓子や果物を携へ、後を追ふて來船し、手眞似や身振りで、面白く可笑しく、靑いゥ眼々の子供と遊び戯れた。

キャンプベル夫人は、これを見て泣いて喜び、アレン隊長は直に長文の電報で、東京公使館及びワシントン本部に報告した。

△の陋劣さに暗くなつて居た乘組員の顏も、すつかり朗らかになり、室蘭區民に感謝しつつ、七月十六日午前、桑港に向け出帆した。

室蘭——桑港

室蘭出帆後は、逐日船内も整頓し、子供達も落付いて來たが、何しろ、育つた國が大陸で、しかも子供の事だ、海事思想など微塵も持合せず、水道と同じに考へて、遠慮會釋なく淡水を濫費し、幾ら注意しても寸効なく、遂に一日の使用量百噸を突破するに至つたので、ウォーカー大尉と相談して、給水時間を定め、其の時間外は各給水パイプに海水を送流した。

茶目連も之には降參して、洗面所で澁い顔を並べて居つたが、誰が敎へたのか、日本語で、「兄さん」とか、「小父さん」とか呼んで、

「どうぞ水を下さい。」

と、やり出し、乘組員を困らせるやうになつたのは、寧ろ滑稽であつた。

萬一に處する爲の短艇操練を、七月十八日から始めた。先づ救命浮帶の使用法と、警笛信號で集合すべき場所を敎へ、始めの一週間は毎日定刻に、以後は隨時警笛信號で之を繰り返し、次いで短艇を水面に下ろす作業を、船員と協同で練習させたが、後には速いのは七分位で準備するやうになつた。

此の操練は乘組船員は勿論、乘客にも大切な事で、全員が一絲亂れず、所定の通り行動すれば、バイカル丸問題

ボート操練（左端はローラン大尉）

の如き馬鹿々々しい騒ぎは起らない。

乗客は乗船後、第一に自分の乗るべきボートは覺えて居くべきもので、救命浮帶の如きは、船に乗ると乗らぬとを問はず、海國日本人なら、誰でも平素から其着用法を心得て居くのが當然だと信ずる。

尾島丸遭難の際に救命浮帶を完全に着用して居つた人は皆無であつたと云ふではないか。

嘗て英國海岸で、二千噸程の客船が、濃霧の爲座礁して沈没に瀕した時、乗客が先を爭ふて乗込むので、折角水上に下ろしたボートが危險に陥つた。其の時船長は拳銃を擬して、所定の人以外の乗艇を拒否し、騒ぎ廻る乗客を鎮めて順序に全部を救助した。

救命浮帶使用教練（中央プラムホール少佐）

若し、日本の船長が之をやつたなら、バイカル丸問題をさへ、あれ程に書き立てた新聞紙は、何んと云ふだらうか？　其の毒筆は想像に難くない。

海を知らぬ國民と新聞屋さんよ。

英國の商務院は此の船長に勳章を贈つて、その行動を賞讃した事をよく覺えて居いて、海難事故のあつた時、無責任なカラ騒ぎと、毒筆を振はないやうに願ひ度いです。

船上に於ける露兒童のヂャンプ

學齡以上の子供は、此の操練の外に、毎日英語と數學が課せられ、その代り、土曜日と日曜日とには、活動寫眞、ダンス、綱引き、拳闘などで、船路の旅情が慰められた。

斯うして一大移動學園陽明丸は、穏かな太平洋を東へ東へと進行した。

汽船が太洋を航海する間は、標準時を用

ひす、毎日の正午の位置に應じた「時」を使用する。從つて毎日々々、其の航海浬數に應じて、「時」を進め、或は逆戻りさせねばならぬ。

陽明丸は東へ東へと、日々二百八九十浬を航走し、經度が六度位づつ東へ移るので、毎日時計を二十四五分づつ進めて行く。一行は毎日正午に、自分の時計の遲れて居るのを不審がるので、繰り返り繰り返し右の理由を說明しても、仲々解り難いか質問を續けて居る內に、七月二十三日、百八十度線を越え、經度が東經から西經に移り、翌日も又二十三日と、同じ日付を重ねたので、愈々不可解な出來事と、質問の矢を浴せて來た。

何んでもない事であるが、奇異の感を起す人が案外多いので、一と通り說明する事にした。

地球は東へ向けて自轉し、一回轉に二十四時間を費して居る。そして地球は、三百六十度の經度に區分されて居るから、經度十五度が回轉するに一時間、即ち經度一度につき四分間を要する。

船が靜止して居る間に、太陽の位置が經度の六度だけ變つたのなら、時計はその儘で好

いか、船自體か東走して、六度東へ移つたのであるから、六度西の位置の時刻を標準とした時計は、二十四分だけ進めなくてはならぬ、

又日付を重ねるのは、經度十五度で一時間の差があり、西は東より遲い事を念頭に置いて、百八十度の經度線に起つて考へると解り好い。

東經百八十度が一日の夜半の時は、東經九十度は午後六時、經度零は正午、西經九十度は午前六時、西經百八十度は一日の午前零時である。

そして、東西に別けても、百八十度は一つの線であるから、西から東へ航走の場合は、一日の夜半即ち午後拾貳時から一日の午前零時に移る。

今度は反對に、西經百八十度が夜半の時は、西經九十度の所はそれより六時間を經過した二日の午前六時で、經度零が二日の正午、東經九十度が二日の午後六時、東經百八十度では更に六時間を經過した、二日の夜半で即ち三日の午前零時である。

つまり、西經百八十度線で二日は消滅し、東經度百八十度線は三日の午前零時になつて居る。此の百八十度線を、東から西へ航走する場合は、消滅した二日の日付はなくなり、

一日から三日に飛び越すのである。

其の地の經度に應じた「時」を、陸上で使用すると、神戸の正午は横濱の午後零時二十六分、門司では午前十一時三十六分と、各地各樣の時刻である爲、通信交通上不便極まるから、日本では東經百三十五度（明石）の正午を以て、內地全般の正午とし、臺灣、朝鮮、關東洲では、東經百二十度の地の時刻を用ひて居る。

船舶が太洋上を航海するには、海圖上に、出發地から目的地への最短距離を求め、其の方向に向け羅針儀、即ち磁石と、毎時間に於ける航走浬數を表はす測程器とを賴りに進航し、その間常に太陽、月、星等に依る天文測量で、洋上に於ける位置、即ち經度と緯度とを測定するのである。

然るに陽明丸の室蘭出帆後は、毎日々々濃霧で、天文測量は出來ず、只羅針儀と測程器とで位置を推定する外なかつたが、七月末日即ち桑港着の前日、神が赤十字に惠んだものか濃霧が一時消散したので、直ちに正確な位置を測定する事を得た。

此の天佑に依り大平洋、航程四千二百五十浬を無事に横斷し、八月一日桑港に着いた。

桑港

港口で米國赤十字社員、新聞記者等の分乘する多くの汽艇に迎へられ、對岸オークランド市との渡船場附近に繫留したが、ここの棧橋を埋め盡して居る歡迎者の中には、邦字新聞社員や救世軍士官等の同胞も見えた。

此處でも獨墺匈兵士の上陸問題で、移民局と市廳との間に相當面倒な交渉が行はれた後、一行は金門公園附近の兵舍に收容された。

金門公園の一角にある茶店の建物、橋、泉水から置石の橋式まで、純日本式で、日本產の金魚や緋鯉も泳いで居り、石段の上の小さな神社の前には、大きな鳥居があり、市中見物の乘組船員の一團は、此の一角に一時間以上も足を留めさせられた。

一行は陽明丸が、石炭、淡水、食料品を補給する間に、各種の歡迎會や市中見物を終へ、八月五日に歸船した。

大桑港の盛況、市長の歡迎、多數の慰問品等を、室蘭のそれと比較して、アメリカは大きいとの口吻を、子供等から聞かされた船員は、せめて室蘭でなく函館に寄港して居たな

らと歎いた。

多數の慰問品の中に、雜誌や新聞から蒐集したアルバムが二三百あつた。商品の包紙を利用し、汽車、自働車、鳥獸等の寫眞を巧に配合したもので、相當の日子を要したものらしく、廢物利用の尤なるものと感じた。

一行中の一婦人が、六歳になる自分の男子に、室蘭で買つた飛白の筒袖を着せて居たが、在留邦人は勿論、米人にもそれが可愛く見えたものか、最も多くの慰問品を貰つて居た。

かくて、八月五日桑港出帆、パナマに向つた。

桑港——パナマ

桑港港口のクリフ・ハスウから、海岸一帶は非常に雄大な景色に富んだ所である。

太平洋から打ち寄せる巨浪は、岩礁に碎けて白く散り狂ひ、海豹は異樣な咆號を續けながら之に戲れ、純白な鷗は無數にその上空を舞ひ翔り、陸上ば又カーボーイでも見えさうな大草原が、眼の屆く限り廣々として居る。

此の自然が映寫する、一大天然色活動寫眞は、寢食を忘れる程小兒達を喜ばし、就寢時

間が來ても上甲板を去らず、警務係が船首へ行けば船尾へ、船尾を追へば船首へと、月明の船上を走り廻つて騒いだ。

こんな腕白な連中であつたが、船が南航を續けて、メキシコから中米沿岸に來ると、露西亞の記錄にない暑さとなり、油を流したやうな海面から、强烈な日光を反射するので、流石にすつかり閉口して、日覆の下で唸り出した。

そして、此の附近名物の鱶や大龜が、水面に浮游して居ても左程に騒がず、何時バナマに着くのか、暑い暑いと苦しんで居たが、その内約二十人計りが日射病にやられた。でも幸に、何れも輕症で、二三日で快復した。

腕白小僧の中に、當年十歳の双生兒が居たが、これは瓜二つ以上の酷似で、腕白仲間でも兄弟の鑑別を誤る位であつた。

此の双生兒は二人共、船内切つての腕白で、日覆を丸く切り拔いて頭を出したり、マストに登つたり、或は昇降口に綱を引き廻したり、毎日何か一つ二つ、子供らしい惡戯をやるが、兄弟のどつちがやつたのか判定に困るので、桑港出帆後直徑二寸位の眞鍮板を作り

常にこれをぶら下げさせ、この板に刻んである1と2の數字で取締ることにしたが、こんな事で温順になる腕白でなく、こんどは一號だ、こんどは二號だと、ウォーカー大尉を苦笑させて居た。

八月十八日午後八時、太平洋の東端パナマ港に到着。直に炭水食料品の補給を始め、翌日午前六時運河に向け進行するので、幹部數名の外一切上陸を禁じた。

桑港からパナマ港まで、航程三千二百五十浬。

パナマ運河

繪葉書が欲しい、果物が喰ひたいなど、子供心の無理からぬ望みを叶へてやりたいと、乘組員の一人と共に、客馬車に盛り上げる程買入れて來たが、到底七百幾十人の欲求を滿たす事は出來なかつた。ところが、翌日ペテルミュゲルと、ガツン兩閘門通過の際、果物や繪葉書を寄贈する篤志家があつたので、兎に角子供等に行き渡つた。

之を見た他の人々も、自働車を飛ばして閘門に驅け付け、密柑、マンゴー、バナナなどを、雨のやうに船上へ投げ込んだ。その度に一行の小兒達が、躍り上つて歡聲を上げるの

で、岸に立つて居た一少女が、大切に抱いて居た人形を投げてくれたが、船まで屆かず中間の水面に落ちた。

それ！人命救助は赤十字社の本領だと、早速繩梯子を下げて之を拾ひ上げたので、船からも陸からも、ドッと一大歡聲が上つた。

運河通航中、その平面、立體の二つの圖を掲げ、一行の參考に供した。初めて瀛船に乘り、大洋を航海し、今又現代化學の粹を集めた此の運河を通り、驚異と歡喜を滿喫した子供達は、赤禍の慘虐を忘れ、嬉々として躍り狂ひ、キャンプベルマザーをして、何時までも何時までも、此の幸福を授け給へと神に祈らしめた。

パナマ運河は全長五十哩半あるが、キエレブラ山を約九哩、深く堀り下げただけで、兩端に各三箇の閘門を設けてチエグリス河を堰き止め、海拔八十五呎の水準を保つ一大人工湖水を築構したものであるから、溪間に屹立して居た大木なども、僅かに其の樹頂を水面に現はすに過ぎず、小さな山は中腹まで水に沒して小島となつて散在し、頗る景致に富んで居る。

湖水が枯渇したら困るだらうと云ふ人があるが、雨量の多い所で枯渇よりも、閘門上に溢れる恐れが多いので、調節設備を施し、常に巨量の水を放流し、更に之を利用して水力發電をやり、運河地域全般の電燈、電熱から動力の一切を供給して居る。

閘門は、とても大仕掛のもので、何れも幅百十呎、長さ千呎あり、どんな大艦巨舶をも、數分間に二十數呎づつ、三回で約八十五呎を浮び上らせ、其の間の運航は、兩岸に配備されて居る各三臺の電氣機關車が曳航し、艦船の機關は一切使用させぬ。

山から舟を下ろすーと云ふ古い歌があるが、これは二萬噸にも餘る巨船を、太洋面より八十五呎も高い所を走らせるのだから、京都の疎水で喫驚するおのぼりさんに見せたら、腰を抜かすに相違ない。

此の科學の寵兒にも、世界の大艦競爭に關聯して、一つの問題が起きて來た。

努級艦が超努級艦になり、噸數も三萬五六千噸となると、艦幅は百呎を超へる。と云つて閘門の幅はさう簡單に擴大出來ない。そこで、頭を痛めた米國海軍首腦部が、世界平和がどうしたとか、うまい理由を持ち出して、運河を生かすためにやつたのが、例のワシン

トン軍縮會議に於ける、噸數制限となつたのではなからうか。

マラリヤの爲に作業員の多くを失ひ、運河開鑿に躓いた佛國運河會社の權利を買收した米國政府は、工事に着手する前に、瘴煙蠻雨にとざされて居る運河地域一帶を健康地とする爲、根氣よく溪流や池沼に石油を撒布し、雜草を燒き拂つて蠅と蚊を絶滅した。

何事にも拙速的猪突をやる吾等日本人は、大に此の點に學ぶべきものがあらう。

生命線滿蒙を開發せよと叫びながら、やがては生命からがら逃げて歸るであらう青年の、徒手空拳で雪の荒野に飛び出して行くのを、拱手傍觀して居る我が國朝野の有識者は、米國政府がパナマに拂つた周到なる用意を、考察するの必要がありはしないか。

運河通過は普通十二時間を要するが、陽明丸は篤志家の來訪等で、ガツン閘門で一と休みした爲、十四時間を費し、八月十九日午後八時頃太西洋上に浮び、運河北端のコロン港には碇泊せず、直に紐育に向け進航を始めた。

パナマ――紐育

翌二十日は朝から北東の風强く、海も時々飛沫を船上に浴びせる程度に荒れ、船體も輕

小女團船暈に惱む

度に動搖した。勿論船員はこれを時化とは見ないのであるが、子供達はバナナや密柑を澤山御馳走になつた翌日であるから、忽ち船暈を始め、顏を蒼白にしてごろごろと横たはり、昨日の歡樂場であつた各艙口上は悲劇場に急變し、醫官や衞生係を天手古舞させた。

そこへ、カメラを向ける惡戲者も飛び出し、苦悶と爆笑の混成合奏で、珍妙な場面がそちこちに展開された。

浦鹽斯德から遠くフインランドまで、地球の三分の二を迂回する大航海中、船暈騷ぎは此の日一日であつたのは天佑と云はねばならない。

キユーバ島の北方にある低い々々島の上に、高い椰子の木が點々として居る、米大陸發

見者コロンブスが、第一歩を印したサンサルバドル島、――それを過ぎると暑氣は刻々衰へ、小兒達も元氣に惡戯を始め出した。

米國東岸には、山らしい山は一つもなく、一帶に低い爲、晝間は始ど陸地が見えないが夜になるとそちこちに燈火が見え、それが北航するに從つて其の數を增し、紐育港口のオーシャンビューと、コニーアインランドとには、無數の强烈な燈火が空を焦して居る。

同時に海上でも、紐育出入の大型客船が、東、南と、頻繁に往來するので、西岸とは反對に、海上の方が小兒達を喜ばした。

八月二十八日紐育着。パナマより航程一千九百七十二浬。

紐育

港務官指定のジャーシー市に向け、米人の誇る自由の女神像の近くを進航した。

自由の本家と自稱するヤンキーズムは、近來頗る鈍色を帶び、賣られた女神にして性あらば、恐らく眼を閉ぢ鼻を摘まむであらうが、銅像の女神は千古不休、同じ姿で自由の炬火を捧げて居る。

ジャーシー市は大紐育市とハドソン河を隔てて居るだけで、一呎平方の地價千幾百弗といふ株街、ウォール町とは僅かに二三哩の距離あるのみである。だから、ウォール町から十數哩を隔つる大通ブロードウエー二百何十丁目よりも繁華であり、地價も高い筈と、陷り易い錯覺から、折角の虎の子をインチキ土地會社に、してやられた人が澤山ある筈だが、米國に於て州を異にする紐育市とジャーシー市は、大阪市と尼崎市の關係とは全然趣を異にして居り、ブロードウエー二百五十丁目が坪百弗になつても、ジャーシー市はジャーシー本位の地價以上には斷じて騰貴しない。

陽明丸は此所で神戸で積んだ砂糖を揚げ、更に北歐方面に行く石炭を積む爲、約二週間碇泊するので、一行は此の間港口のスタテン島の兵舍に滯在する事となり、小蒸瀣船に分乘して、約五十日間の住居であつた陽明丸を一時離れた。

小兒達は此の五十日の間に、散髮して貰つた者も澤山あり、玩具を拵えて貰つた者もあり、乘組員との間は非常に親密になつて居たので、兵舍に行く事を喜ばず、爲に赤十字社幹部は慰撫大に努め、そしてやつと一同を連行した。

邦字新聞紐育新報は、一行の旅情を慰める爲、在留邦人から義金を募つて居たが、締切の迫つて居るにも拘らず、僅かに四拾九弗五拾仙を得て居たに過ぎなかつた。

紐育在留の邦人は知識階級の人々のみで、常に日米親善を說き、對米外交の不振を嘆いて居ると兼々聞いて居る。

然るに、知名の士を網羅して居る大會社の支店は風馬牛であり、日本赤十字社紐育支部は鳴りを鎭めて動かず、更に總領事館は入港手續の爲出頭した當の船長に、

「日本の漁船がロシヤの小兒團を乘せて來るといふが何丸かね？」

と、質問する悠閑振りである。

此の領事館から、至急出頭せよとの嚴命を受け、船長が再び出頭すると、

「外國の港では何事も愼重にやつてくれ。殊に排日機運の擡頭しつつある折柄、あんな事をしてくれては困る。」

と、叱り飛ばされた。

その、所謂あんな事とは——

吾等國民が齊しく祝福し奉る、八月三十一日の天長節を迎へ、陽明丸は船舶儀禮により、前後の檣頭高く大日章旗を掲揚した事から起つた問題である。

陽明丸は傭船者の求めにより、常に後檣に星條旗と赤十字旗を連掲し、米國十字社を現はして居た爲、此の儀禮の爲の日章旗を、星條旗の上段に飜へしだのだ。

それを見てジャーシー市の狠狽者や警官などが、怒號しながら押しかけて來て、

「米國國旗に侮辱を如へるとは何事か！」

とか、

「日本の國旗を引き下ろせ！」

とか、物凄い權幕で詰め寄せた。

實を云へば、船員の注意も足らなかつたのであるが、今更退く譯にも行かぬので、日章旗を取り除けとは日本の皇室に對する不敬であり、同時に吾等日本國民を侮辱する者である。此の星條旗は米國國旗として用ひ居るものではなく、單に傭船者を表現する爲に掲揚して居るに過ぎぬと論爭中、ウォーカー大尉が歸船したので之と相談の上、中央の米國國

旗を除き、日本赤十字社備船の表現に代へて解決した。ところが、例の排日紙がこれを大きく書き立てたので、外交官が御冠を曲げたのであるから、船長は經過を報告して、

「當方の處置が正しではないか、寧ろ賞讃をして貰へるかと考へて居た。」

と逆襲を加へて退出した。

こんな外交官に依り日米親善と、外交振興を求むるは、木に登つて魚を求めると同樣である。

なほ領事館に關してはこんな話もある。

一、或船の乘組員數名が脫船して、某所に隱れて居た。それを船長が探知して、其の地の警察署へ取押へ方を願ひ出る爲に、領事館の援助を求めた。ところが、何所で如何云ふ條件で雇ふたかと、雇傭契約から身許調査などを始め、書類の提出を命じ、くだらぬ手數を重ねて居る內、肝心の脫船者は行衞不明になつた。

二、領事館のない港で病死した乘組員があつて、次の港で領事館に屆出をしたら、相續人を明示せよとか、遺產受領者は誰かとか、海外就航中の船舶には不可能であり、且又法律も命じて居ない條件を並べ立てて、其の屆出を受理しない。

其の他、大小の問題を羅列すれば際限がない、外交振肅、或は邦人保護の本領を遠く離れたものが多く、追隨主義でも兎に角外交機關として動いて居るのは上の部だ。

此の傳統的弊風を、一刀の下に打破した巨人、松岡洋右氏、及び內田外相に對し筆者は日本國民として最大の感謝を捧げる者である。

入港翌日船具店遠藤小刀商會の斡旋で、紐育新報社を訪問し、義金募集の擧を感謝し、併せて一行は千餘名の大集團で、小兒だけでも七百八十名の多數なれば、五拾弗足らずの慰問品は寧ろ無い方が好く、眞に一行を慰め日米親善に貢獻せられようとなら、更に一段の努力が望みたいと激勵し、陽明丸乘組員の名で金壹百弗を投じた所、急に篤志家が現はれて、忽ち五百二拾九弗五十仙に達した。

が、總領事館は勿論、日本赤十字社米國支部、及び一流會社からは遂に一仙の義金をも得られなかつた。

鄕等は日米親善も、對米外交振興も、口にする資格を、權利を、自ら放棄せられたのであるか。

紐育新報社及び在留邦人中の篤志家、並に義金據出を斡旋盡力せられた遠藤、小刀兩氏、殊に義金據出の外に慰問用の品物を、特に安價に提供せられた森村商會に對し、筆者は深甚なる謝意を表して置く。

何事にも世界一を振り翳す米人には、少なからず當てられるが、紐育だけは世界一と誇稱せられても、反駁し得ぬ大都會であるから致し方がない。

紐育を起點とする鐵道が十三線、定期航路が八十七線、出入船舶が一日三百餘隻、圖書館の數が七十有餘、地下鐵道は各社線總長が八百四十哩、各線共料金は五仙均一制、そして、これは最近の事實だが、三十階以上の高層築物が九十四、最高はエンパイヤ・ステート・ビルで八十六階、高さ一千二百五十呎とは、聞いただけでもウンザリしよう。

此の大紐育市の中心であるマンハッタン島は、イースト河とハドソン河との間に在り、東西二哩、南北十六哩といふ恐ろしく細長い島で、三四線の高架と地下電車が縱走して居る。

此の島の南部がビヂネス・センターで、三十階から五六十階の高層建築物が屹立し、中

部は小賣店街で、三越・大丸・十合・高島屋が總がかりでも、及ばぬ程の桁外れの百貨店がある。そしてその間々に、活動寫眞館があり、料理屋があり、舞臺にホン物の汽車を走らす芝居小屋もあつて、奇拔な電氣廣告とイルミネーションが不夜城を現出し、北部一帶は住宅地で、十階二十階のアパート街である。

此の島の南部は、今地價が一呎平方千弗以上もして居るが、三百年程前に和蘭政府が此處の開發に手を着け、先づ土人酋長に鱈腹芳烈な火酒を馳走し、有頂天に醉つ拂つた頃を見計らつて、賣買交渉を持掛け、僅かに六十ギルターで買ひ取つた。

マンハッタンといふ言葉は、土人語で「醉つ拂ひ」と云ふ意味で、氣の付いた酋長が醉つ拂つて居たと口惜しがり、「醉拂ひ、醉つ拂ひ」――「マンハッタン、マンハッタン」と繰り返して居たのが島名になつたと云ふ、面白い話が傳はつて居る。

この、科學文明の都市大紐育に、最近まで馬車鐵道があつたのだから面白いではないか。營業許可期限が滿了せねとの理由で、四分の一哩程を一人の乘客もなしに、一日幾往復かヨタヨタやつて、科學文明に疲れた人達を興がらせて居た。

紐育の諸種の團體は、殆ど連日一行を歡侍したが、就中ハドソン河舟遊、ボロンクス公園の慰安會、遊覽自動車に依る市中巡行等は、實に大袈裟なものであつた。

米國赤十字社は、一行を佛國ボルドーに止め、徐ろに小兒達の近親者を求めつつ、露西亞の國情を見る事に決し、軍醫少佐エバソール氏は、バラック建設其の他の要務を帶びて先發した。

すると其の後で、小兒團から次のやうな無理な要求が出た。佛國は今猶露西亞と交戰狀態だから、我々を佛國へ送ることは中止して貰ひたい。そして、ペトログラードへ十二時間以內で歸着し得るバルチック海の一港へ送つてくれ、然らざれば此の儘米國へ置いて貰ひたいと云ふのだ。そして遂に、連署の請願書を米團大統領へ送達した。

ウォーカー大尉と愛猿

が、米國赤十字社としては、勿論一行を米國へ留めて置く譯には行かないし、と云つて、ペトログラードへ十二時間以内で歸着し得られる港へ送らうとすれば、エストニヤかフインランドの一港を選ばねばならぬが、エストニヤは既に赤化しつつあり、フインランドは冬營に適せず、で、小兒團の要求は之を斷乎として拒否した。

そこへ、何所にでもあることだが、出酒張りの婦人團體、アメリカン・ウーメンス・エマーゼンシー・アソシエーションのオールド・ミス一黨が・小兒連の肩を持つて太鼓を叩き、何が何んだか解らなくなる程に問題を紛糾させた。

その最中に、小兒團の方では、十人二十人と集團的に、しかも連日、兵舍の塀を乘り越えて脫走を始めた。そこで赤十字社側は、遂に小兒團を武裝衞兵で警備させ、一方、警察に依賴して總動員で、脫走者を追求したが十七名は行衞を晦ましてしまつた。

出酒張り婆さん共は益々得意になつて、饒舌を振るふので、遂に赤十字社側が折れて豫定を變更し、バルチック海行を發表した。

兵舍滯在中、ベーラと呼ぶ十六才の少女が病歿した。

此の少女は露都の豪家に育ち、十三才の時暴徒に襲撃され、兩兄は力闘して斃れ、父は自盡すると云ふ慘劇の中から、無我夢中で飛び出し、夢遊病者のやうになつてシベリヤに出た所を救はれたもので、爾來極度の神經衰弱に陷り、時には發狂狀態にまで昂進したりして居たが、衰弱の果、遂に異鄕で父兄の後を追ふたのであつた。

限りなき慾望に驅られる吾等人類は、斯かる悲慘な人生を終つた少女の事を考へ、自省する必要があらう。

續いて又不祥事が突發した。

ニコロフスキーと云ふ十四才の少年が、棒切れを銃に擬し、武裝衛兵と戯れて居たが、どうしたはずみか、衛兵の銃がドンと發射し、少年は頭部貫通銃創で即死した。

すると、例の婆さん共が、又躍り出した。

曰く、裝塡した銃器を弄したのが不可いのだ。又曰く、衛兵が勤務を忘れて、子供に戯れるとは何事ぞ。等々と、鋭く攻撃して、不慮の出來事だと輕く逃げる當局を追求して居たが、陽明丸の紐育出帆までに、結論を聞き得なかつたのは遺憾であつた。

更に又哀れな女性があつた。

シミオンと呼ぶ妙齡の露婦人が、米國鐵道技師とシベリヤで嬉しい婚約を結び、樂しい希望に燃えつつ遠く紐育に航海し、許婚の人から懷かしい電報を受取り、年頃の友達に羨まれながら、躍る鼓動を押えて開いて見ると、どうだ「破約」とある。

聲も立て得ず倒れ伏したシミオンは、涙を拭ひながらキャンプベル・マサーに、再びシベリヤに送還してくれと訴へて居た。

喜びの絶頂から悲しみの深淵に投げ込まれたシミオンは、せめて樂しかつたシベリヤの土を求めたものであらう。

新聞紙が報じつつあつた、シベリヤに於けるヤンキーの不德行爲は、事實であつたものと首肯される。咄——

斯くて九月十四日、「うちに歸つて安心したと」喜ぶ一行を、再び乘せて陽明丸は、鼻摘みの自由の女神像を後にして、紐育を出帆した。

紐育——ブレスト

紐育在留邦人の眞心の結晶である新報社の寄贈品は、量に於ても質に於ても、米人のそれとは比較にならぬ程貧弱なものであつたが、其の効果は反對で、小兒一同非常に感動して居り、それが分け與へられる度毎に、

「日本人から貰つた菓子だ」

などと珍重し

「お菓子を有難う。一つ召上れ」

と、乘組船員を取卷いて勸めるので、酒なら、斗酒なほ辭せずと云ふ連中が、そこでもここでも、悲鳴を上げるやうな始末だつた。

紐育出帆の翌々日、一露婦人が病歿した。

紐育滯在中に內耳炎の手術を受け、安靜を保つ爲殘留を勸められたのを顧みず、死を期して行を共にした爲だと云ふ。

安井機關士菓子攻にさる

其の夜は船尾の一角に祭壇を設け、帆布袋に納めた「むくろ」を安置し、赤十字旗を其の上に被せ、生前親しかつた者は勿論、幾度か死地に陷りながら、堅く手を握り合つて此所まで行を共にした多くの人達の、祈りと嗚咽の内に數刻を送り、やがて正子となつて、陽明丸は船首を北に向けて靜止し、之等の人々の祈りと慟哭裡に、西經六十五度、北緯四十度の水底に葬つた。

凶事は三度重なると云ふ諺があるが、十六才の少女の死と、ニコロフスキー少年の死と、これで凶事が三度續いた譯で、以後至極平穩に、航程三千二百浬を無事に航海し、九月二十七日佛國西北端のブレスト港に着いた。

ブレスト港

在港の艦船は何れも滿船飾をやつて居る。

まさか遠來の陽明丸を迎へる爲でもあるまいと聞いて見たら、新任大統領の就任を祝福する爲だと譯つた。

當港でも、日米人以外の者の上陸は勿論、外來者との面會をも禁じ、武裝兵を以て監視

すると云ふ物々しい取締りであつたが、埃匈人は埠頭に軒を並べて居るバーから、巧に酒を手に入れ、露軍に捕えられて以來二三ヶ年間の、渇を醫した迄はよかつたが、東西其の揆を一つにする亂に終り、警務長ウォーカー氏を手古摺らした。

しかし、警務長自身も、濃艶なフレンチ・ガールの酌で、强か此の禁制の水を賞味して居るのだからどうにもならず、船尾の一角には徹宵絃歌がさざめいて居た。

一行を迎へる爲、ボルドーに新築した廠舍の寫眞が送られて來た。

五棟の平屋バラックで、十五萬弗を要したと云ふだけに、實に立派なものであつたが、レニングラードに思ひを馳せて居る一行は、てんで之を顧みなかつた。

過激派の難を佛國に避けて居る多數の白色ロシヤ人中には、必ず一行の近親者あるべしとの推察から、米國赤十字社佛國支部が探索した努力も空しく、僅かに二名を見出し得たに過ぎなかつた。

此の近親者に引渡すべき二名と、南露ウクライナ方面に歸還するもの四名と、合計六名が此處で一行から別れることになつた。

シベリヤの荒野で生死を共にし、互に助け助けられた友人と、恐らく永久の別れとなるべき此の別離を、一同いたく悲しんで、幾度も幾度も接吻と抱擁とを繰り返し、果は監視兵の制止もきかず、門外まで走り出て別れを惜しみ、何も知らぬバーの白首連をまで、貰ひ泣きさせて居つた。

此の港では佛國海軍から、石炭と淡水の供給を受けたのであるが、當の水兵さんは英語を知らず、一方乘組員には佛語を解する者がない。で、色々考へた末、

佛語を解する露婦人
露語を解する獨逸人
英語を解する獨逸人

と、三人の通譯を解して漸く打合せを濟ました。

よく齒の拔けたやうな話だと云ふが、之はまた齒も皮も味もない、氣の拔けたやうなものであつたが、兎も角、石炭も水も充分積み込んで、翌二十八日キール運河に向げて出帆した。

ブレスト――キール運河

翌二十九日、英佛間のドーバー海峽航行中に、經度は又元の東經に戻つた。東經百三十一度の浦塩斯德から、一路東へ東へ進み、百八十度線を越えてからは西經を數へて居た。それが今、英國グリンウイッチ天文臺のある經度零の線を通過し、又元の東經を冠するやうになつたのである。

ドーバー海峽から北海一帶は、大戰中獨逸潛水艦活躍の中心であり、近世海戰史の最後のページを飾る英獨主力艦隊決戰の地である。

陽明丸は、平和に歸つた靜かな海上を一路北進し、水平線上に明滅する燈光で、聯合國監視の下に今盛んに破壞されて居るであらう大要塞のある、オスランド島の有樣を思ひ浮べつつ三十一日の朝、上流にハンブルグ港のあるエルベ河を溯り、キール運河の南端港、ブロンスビュートに到着した。此の航程八百浬。

キール運河

此の運河は、カイザー・ウキルヘルム・カナルの本名の通り、前獨逸皇帝に依つて開鑿

されたもので、全長六十五浬、北端がキール軍港に通じて居る爲、一般にキール運河と呼ばれて居る。

軍事上の目的を主としたものだけに、運河の幅、深さ共に、大艦巨舶の運航に些かの困難をも感じないと云ふ立派なものである。

此の運河にも南北端に閘門があつて、バルチック海と北海の潮高、即ち海水面の高さに高低があるのを調節して居る。

獨逸の誇りとする鐵道網は、水面上四十米突の鐵橋、回轉橋、又は中央から開口する跳橋等で、運河を横切ること約十ケ所、それが何れも大規模のものなので、流石は獨逸だと驚歎させられる。

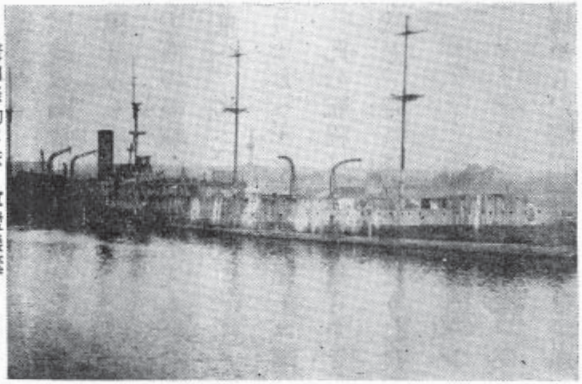
スエス、パナマと、此のキールの三大運河を比較して見ると、全長はスエズ第　でキール之に次ぎ、幅はパナマが第一でキール之に次ぎ、通航の難易はキール最も容易で、スエズは反對に一番困難であり、パナマは繁累極まるものである。沿岸の景趣はパナマ最も勝れ、スエズは廣漠たる砂漠で他の二者と到底比較にならぬ。海運上の價値はスエズ、パナ

マ相伯仲し、キールは大したことはないやうに思ふ。

運河内の造船工場で、數隻の軍艦が解體中であつた。水先人に聞いて見ると、媾和條約に依る廢艦で、英佛兩國が解艦を監視して居ると云ふ。

敗戰の悲哀を如實に示して居るもので、傲然たりし戰前の面影は、水先人以下來船中のどの獨逸人にも認められず、反對に深い哀愁の色を帶びて居た。

戰敗國民の苦惱を思ふにつけても、非常時日本の文字を黨略本位の政治屋、國家觀念のない政商、及び新らしがり屋の國際主義者共に、ハッキリ認識させる必要があると思ふ。



媾和條約に依る軍艦廢棄

一行中の獨逸人は勿論墺匈人も、南北兩閘門通過の際、食料品、衣類等々、手當り次第に陸上の人々に投げ與へて居た。數日後に任務を終る陽明丸の船艙には、之等の諸品が山

積されて居るので、米國赤十字社幹部も、知らぬ振りで横を向いて居た。

キール――ヘルシングフオース

バルチック海からフインランド灣一帶は、夥しい數の機械水雷を沈置した露獨兩國共、戰後の國情から掃海をやらないので、沈設區域から移動したもの、或は繫鎖が腐蝕して浮流するものなどあり、全海面を危險區域と見なければならぬ實狀にあつたので、特に此の方面の經驗に富む水先人を求め、瑞典東岸ゴツトランド島の西側を北進し、島の北端から東へ、北へ、又東へと、エストニヤ西岸諸島を迂回し、レベル港口から眞北へ直進し、十月十日ヘルシングフオース港に安着した。

此の航程は八百浬足らずであるが、常に針路を轉じ、夜間は勿論晝間でも、屢々速力を減じ、時には停止したりした爲、普通に航海する二倍以上の時日を要した。

ヘルシングフオース港

フインランド共和國は、長年の間ロシヤの抑壓を脱する爲、常に獨逸に接近して居た關係から、獨立後は凡てを獨逸に範を取り、文武官の服裝から貨幣の樣式まで、獨逸ソック

リで、カイゼル髭を撚り上げて居る武官の多くを途上で見かけた。從つて外國語も獨語が主で、佛英之に次ぎ、露語は知つて居ても口にする者がない。

當港でも露人は一切上陸させない。ロシヤと眼と鼻の此の港まで來たのであるから、何か國内の事情が知れさうなものと焦慮する小兒達の爲に、露字新聞を求めて歸船したが、東北フインランドに關する記事ばかりだと失望するので、更に色々と買求めて見たが、遂にどれもソビエートロシヤに關するニユースは見出すことが出來なかつた。

市中見物後、とある食堂に這入つては見たが、言語不通で閉口して居る所へ、白髯豐かな紳士から、突然英語で、

「諸君は日本人かね？」

と、呼びかけられ、それから卓を共にして、此の紳士を煩はして食事をしながら、その語るところを聞いて居ると、ロシヤの帝政當時、露國外務省の相當の高官であつたらしく、故伊藤公、本野子、末松男等とも面識あり、ソビエート一番乘りの大阪毎日記者、布施氏の入露に際しても、尠からず盡力したと云ふことであつた。

遺憾なことには、其の紳士の名を逸したので、其の時記念撮影した寫眞を、ここに挿入して居いた。

在泊三日、フインランド官憲と米國赤十字社の交渉なり、ウキボーグの東南六十哩の無名の寒村に在る舊隔離病舍に、一時小兒團を收容する事に決し、十月九日當港出帆、又危險水面を避けてフインランド沿岸を曲折し、翌十日コイビストに到着した。此の航程百三十浬。

コイビスト港

コイビストは露國々境に近い港であるが、戸數は五六十に過ぎず、少量の木材を小型汽船や帆船で輸出するだけの、極めて貧弱な港である。だが、フインランド共和國は、國防上此所を相當に重視するらしく、飛行機數臺を常

備する水上飛行隊を置いて居る。

此の港には不似合な、三千噸級の獨逸汽船が先着して居たが、これは露獨の捕虜交換船で十一日の未明、獨兵を滿載して出帆した。

この汽船でこの港に送還された露兵中には、小兒達の近親者が幾人かは居たかも知れない、せめて二三日早く此の港に到着して居たならと、出帆する汽船を感慨深く見送つて居たのは、無理もない事であつた。

陽明丸は此の港で使命を果たすので、給養品、食料品及び器具、寢具の陸揚げを始め、十三、十四の兩日で、之等の一切と、獨墺匈人を除いた一行全部を上陸させた。

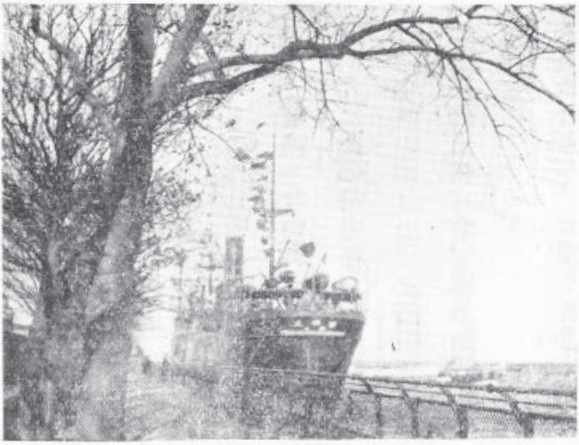
浦鹽斯德出帆以來、寒暑を共にし、三ケ月間交誼の深かつた乘組船員に、一行の誰もが聲を曇らせて、「さようなら」、「さようなら」と繰り返した。

乘組船員も亦、彼等の前途を祝福して、これを驛頭まで見送つて行つた。

一時に九百人に近い大家族を失つた陽明丸は、大風一過に等しい異妙な寂莫を感じながら、丁抹の首府コペンハーゲンに歸着し、積荷の石炭を揚陸し、獨墺匈人等をも此所で上

陸せしめ、臨時施設の一切を取除いて、十月二十八日、元の貨物船に復歸し、問題の星條旗も煙筒の赤十字も姿を消し、勝田汽船株式會社の社旗が、メイン・マストに飜へることになつた。

日・米・露・獨・墺匈・チエツコスロボキヤ・フインランド及びポーランドの、十ヶ國一千に餘る多數が、一家の如く、航程一萬五千五百余浬、洋の東西、地球の三分の二を迂回する九十餘日の航海中、些かの紛議もなく、荒天にも際會せず、危險極まる水雷の浮流する、バルチツク海をも安全に航過し得たのは一行の幹部、陽明丸乘組員及び關係者一同の熱誠と、赤十字旗に垂れ給ふた神佛の加護に依るものと、茲に感謝の意を表して擱筆する。



コツペンヘーゲン港頭ノ陽明丸

此の可憐な小兒達が、其の後幸福な日を送つて居るかどうかは、一切不明で知る由もないが、陽明丸は先年宮城縣金華山の海岸で、濃霧の爲暗礁に乗り上げて沈没した。

部内
書類番号 ろの11番
整理番号 14番5函
310.6

（以印刷代謄寫）
大阪・金谷印行